

地域体育指導者に関する研究

—特に、施設開放指導者の役割を中心に—

福 元 和 行

(昭和56年5月28日受理)

序 論

昭和36年施行のスポーツ振興法の中で、指導者の資質の向上を図るために必要な措置を講ずるよう述べられている。また、昭和48年の保健体育審議会の答申⁽¹⁾でも、指導者の充実の必要性はグループづくりや施設の整備等の必要性と並んで挙げられており、社会体育を振興していく上で大きな柱として期待されてきたし、今後もますます増加する運動実践者に対するその活動の重要性は、増大してくるものと考えられ、指導者の量的増加とともに、質的充実が図られなければならない。

ところで、これまでの地域体育指導者の研究を眺めた場合、特定の指導者に研究が集中していると言える。制度的に確立された体育指導委員の研究では、片山⁽²⁾、正等⁽³⁾のものがあり、また報告書も公にされている⁽⁴⁾。また、民間スポーツ団体の養成する指導者であるスポーツ指導員、トレーナーに関しては、杉本⁽⁵⁾や犬飼⁽⁶⁾等のものであり、報告書も出されている⁽⁷⁾。これらの指導者に関する研究では、各指導者の活動状況(実態)、社会的属性などの分析が行なわれているが、このような状況を山本等⁽⁸⁾は「単なる実態調査であったり、あるいは体育指導委員論とかスポーツ指導員の養成とか機能を論じたりするなどさまざまな指導者問題について個別に取りあげているにとどまり、社会体育にかかわる指導者の問題を包括的に追求した事例は数少ない」と述べている。このように、個別的であり、包括的に検討していないという指摘がなされるが、換言すると体系が明確でないということでもある。つまり、各指導者の役割分担、相互関係が不明瞭であるということである。そこで、社会体育指導者の分類についてみてみたい。江橋⁽⁹⁾は社会体育指導者を公共と民間に分け、公共には公共機関や施設で社会体育を担当する職員、体育指導委員を含ませ、民間にはスポーツ団体の指導者、民間団体の指導者、職場の指導者、商業施設の指導者を含ませている。また、野口⁽¹⁰⁾の分類では、市町村教育委員会の非常勤公務員としての体育指導委員、社会体育・スポーツ施設(都道府県、市町村立)に配置された指導者、日本体育協会や地方体育協会、および各種スポーツ団体がようしている各種指導者やトレーナー、各種企業体もっている指導者、公益法人や民営の体育・スポーツ施設に配置されている指導者に分類している。金崎⁽¹¹⁾は公共と民間の指導者に分類し、公共には教育委員会体育担当職員、公共体育施設の指導者、体育指導委員を含ませ、民間にはスポー

ツ指導員，スポーツ少年団指導者，スポーツ団体の指導者，トレーナー，レクリエーション関係指導者，民間体育施設の指導者，企業体の体育・スポーツ指導者を含ませている。

これらの分類は，特定の名称を付与された指導者が含まれていたり，活動する施設が分類の観点になっていたり等，分類の視点が混乱しており，統一されていない。公共と民間に分類した場合，確かに公共と民間にはどのような指導者が存在するのを見るためには適当であるが，それらの指導者の役割，機能は何なのか，という点は明確でなく，極めて現状網羅的な分類と言える。指導者の体系化を試みる場合に必要な役割の明確化を意識した分類が少ない中で，役割に注目し，指導者を広く捉え分類したものに宇土の分類⁽¹²⁾がある。宇土は指導者を運動者への指導の関係が直接的か，間接的かという点で分類し，体育者と体育指導者とに分けている。宇土によると，体育者とは「体育現象に直接タッチして，運動者を導き，体育現象を支えているところの体育事業に直接従事する人である」と規定され，また体育指導者とは「体育者を指導する人」と説明されている。このような指導者の指導内容，役割の相異に着目した分類は Ball & Cipriano⁽¹³⁾や Curtis⁽¹⁴⁾にも見られるが，本研究は指導者の役割を検討するものであり，宇土の言う「体育者」，Ball や Curtis の言う「face to face Leadership」を問題にすることになる。次に，指導者の分類の観点として，体育事業に着目したい。地域社会には様々な体育指導者が存在するが，指導活動は3つの体育事業，クラブサービス，プログラムサービス，エリアサービスの中でほとんど行なわれ，これらの事業との対応で役割が明確にされる必要がある。各体育事業の特質は異なり，また事業に対応した運動者の特質も異なる。これらの事情を理解した上での指導のあり方，役割が究明され，各体育事業の指導者の役割，条件が明確化された後，指導者の体系化が可能となろう。

本研究は施設開放をとりあげており，施設開放の指導者の役割の検討を目的としているが，具体的には以下の2つである。

1. 文部省調査⁽¹⁵⁾によると，公立学校（小，中，高等学校）全国37,802校中，施設開放を実施している学校は11,773校（31.1%）あり，管理あるいは指導に携わる人を配置している学校は，11,773校中9,696校（82.4%）に達しているが，9,696校中，施設の管理だけを行なう人を置いている学校が2,625校（22.3%），活動の指導だけを行なう人を置いている学校が1,468校（12.5%），管理と指導の両方を兼ねた人を置いている学校が5,603校（47.6%）と報告されている。この調査結果にみられるように，開放施設には，指導者，管理人のどちらを配置すればよいのか，という問題がある。この点を，運動者の希望と，運動者の変化を手がかりに探る。

2. 指導者に対する希望は，運動者の属性によりかなりの多様性が予想されるが，指導者の必要感，希望する指導内容，方法について，性，年齢，活動の仕方，運動種目，運動生活の階層の観点から分析を加え，どういう運動者がどういう指導のあり方を期待しているかを探る。

研究の方法としては，体育館開放，学校開放の利用者に対して質問紙を配布し，その場で回収した。

1. 調査時期 昭和52年7月～10月
 調査対象 指導者の配置された体育館, 学校開放利用者 245名
 指導者の配置されていない体育館, 学校開放の利用者 76名
 計321
2. 調査時期 昭和54年7月～8月
 調査対象 体育館開放利用者 249名

結果と考察

I 運動者の希望

1. 男女

指導者の必要性について示したのが表1である。全体では、指導者を望むもの79.4%、施設用具を維持、管理してくれる人がいればよいとする者8.1%であり、圧倒的に多くのものが指導者を求めていることがわかる。次に、男女別にみると、男子(73.2%)よりも女子(89.6%)の方に指導者の配置を希望する者が多く見られる。一方、指導を行なわない管理人でよいとする者は、女子(3.1%)よりも男子(15.5%)に多く見られ、性別による指導者に対する必要感の違いが指摘できる。

表1 男女別にみた指導者の配置希望

	男	女	計*
指導者がいた方がよい	73.2%	89.6%	79.4%
管理人で十分である	15.5	3.1	8.1
ともに不要	6.2	2.1	5.9
N・A	5.2	5.2	6.5
計(=100%)	(97)	(96)	(321)

〈注〉※は性別不明も含む

指導者にどのような内容の指導をしてほしいと考えているかを示したのが表2である。男子では、技術の指導(63.4%)、マナー・エチケットの指導(26.8%)、ルール・審判法の指導(32.4%)などが目立つのに対して、女子では技術指導(87.2%)、ルール・審判法の指導(25.6%)、トラブル防止への助力(11.6%)の順に続いており、女子は男子よりかなり技術指導を希望していることがわかる。男子ではトラブル防止への助力やマナー・エチケットの指導で女子よりも多くの希望が見られる。男子にこのように運動行動に関する指導希望が多く見られるということは、男女別に活動

が行なわれることが多いことを考慮すると、男子に粗雑，乱暴等マナー面で好ましくない傾向が見られ，これらの指導の必要性を感じているものと考えられる。

表2 男女別にみた希望する指導内容

	男	女	計 [※]
指導技術	63.4%	87.2%	78.8%
ルール・審判法	32.4	25.6	25.5
用具の使い方	7.0	9.3	7.5
マナー・エチケット	26.8	20.9	20.8
トラブルの防止	21.1	11.6	14.9
手軽な運動	8.5	7.0	7.8
親 睦	21.1	11.6	17.3
クラブづくり	1.4	7.0	6.7
健康相談	8.5	1.2	5.1
そ の 他			0.4
N・A		1.2	1.2
計 (100%)	(71)	(86)	(255)

〈注〉 ※は性別不明も含む

(重複)

これまで、指導者の必要感，希望する指導内容を考察し，男女間に差異のあることがわかったが，それらの差異の生ずる理由を探ろうとしたのが表3である。ここでは各種目についての学生時代の運動経験を尋ねている。男子では，その種目のクラブに所属して活動していたもの44.1%，その種目について経験したことがなかったもの27.2%となっており，女子では，クラブ経験者31.7%，未経験者43.6%となっている。このように，学生時代の運動経験では男子にクラブに所属して活動していたものが，また女子には，その種目についての未経験者が多いことがわかる。さて，学生時代の運動経験別に，各々の種目の難易の程度をみたのが表4である。難しいと答えたものは，クラブ経験者で54.6%，未経験者で73.8%であり，未経験者に20%近く多く見られる。クラブに参加して活動した者は，未経験者は勿論，授業で練習した者と比較しても，一般的に高い技術を有し，またルール，練習法などの知識面でも豊かであると考えられており，当然の結果と考えられるが，男子にはクラブ経験者が多く，女子には未経験者が多いという表3の結果に照らすと，女子は男子より技術が低レベルにあり，学習すべき技術が山積しているということではなかろうか。したがって，男子よりも指導者の必要性を強く感じ，技術指導を希望する割合が高くなっているものと考えられる。

表3 男女別にみた学生時代の運動経験

	男	女	N・A
クラブ	44.1%	31.7%	41.7%
校内大会	5.9	5.0	8.3
授業	3.7	5.9	8.3
経験なし	27.2	43.6	25.0
その他	14.0	6.9	8.3
N・A	5.1	6.9	8.3
計 (=100%)	(136)	(101)	(12)

表4 学生時代の運動経験別にみた種目の技術の難易

	クラブ	校内大会	授業	経験なし	その他	N・A
難しい	54.6%	50.0%	58.3%	73.8%	55.6%	53.3%
やや難しい	30.9	35.7	25.0	21.4	25.9	13.3
簡単	12.4	7.1	16.7	3.6	18.5	20.0
N・A	2.1	7.1		1.2		13.3
計 (=100%)	(97)	(14)	(12)	(84)	(84)	(15)

2. 活動の仕方

指導者の必要性では、割合の高い順に家族で活動するもの(100.0%)、一人で活動するもの(91.2%)、クラブ員数人で活動するもの(85.5%)、クラブ員多数で活動するもの(75.4%)となっている。(表5)

表5 利用のしかた別にみた指導者の配置希望

	クラブ員多数	クラブ員数人	友人数人	一人	家族	N・A
指導者がいた方がよい	75.4%	85.5%	75.5%	91.2%	100%	47.1%
管理人で十分である	6.2	1.8	15.5	4.4		5.9
ともに不要	15.4	5.5	4.5	1.5		
N・A	3.1	7.3	4.5	2.9		47.1
計 (=100%)	(65)	(55)	(110)	(68)	(6)	(17)

希望する指導内容についてみたのが表6である。技術指導の希望ではクラブ員数人で活動するもの及び一人で活動する者が約87%であり、クラブ員多数79.6%、友人数人68.7%となっている。ま

た、ルール・審判法の指導はクラブ員多数で活動するものと一人で活動するもので約34%希望している。また、一人で活動するものにマナー・エチケットの指導に高い(33.9%)希望が見られる。

表6 利用の仕方別にみた希望する指導内容

	クラブ員多数	クラブ員数人	友人数人	一人	家族	N・A
技術指導	79.6%	87.2%	68.7%	87.1%	83.3%	62.5%
ルール・審判法	34.7	10.6	22.9	33.9	16.7	25.0
用具の使い方	6.1		8.4	12.9		12.5
マナー・エチケット	26.5	23.4	9.6	33.9		
トラブルの防止	14.3	19.1	15.7	14.5		
手軽な運動法	8.2	2.1	12.0	6.5	16.7	
親 睦	8.2	17.0	21.7	19.4	16.7	12.5
クラブづくり		12.8	8.4	4.8		12.5
健康相談	6.1	2.1	2.4	11.3		
その他						12.5
N・A	2.0	2.1		1.6		
計(100%)	(47)	(47)	(83)	(62)	(6)	(8)

(重複)

このような結果より、一人で来るものは運動するために必要な技術、知識をかなり求めて活動する層であるが、その活動の仕方は一人での活動が中心になるため、まず、自由な運動を、安心して実施できるような運動の場を確保して欲しいと希望しており、そのために運動者に対するマナー・エチケットの指導を多く希望しているのではないかと考えられる。また指導者の必要性でも、仲間を伴った活動が仲間と楽しく活動することにより活動のねらいを満足したり、あるいは仲間に指導してもらうなど可能であるが、一人での活動の場合、これらのことは考え難く、指導者に指導を強く求めていると考えられる。表7は活動の仕方別に希望する指導方法をみたものであるが、ここでも同様の理由で、一人で活動するものは求めに応じた指導(29.0%)よりも積極的な強い指導(55.1%)を望んでいるものと考えられる。友人数人と活動するものは、指導内容の希望で、技術の指導を求める者が約69%で、他の活動の仕方と比較して最も低い割合を示した反面、親睦への助力を希望したものが約22%あり、最も高い割合を示している。技能の向上を他の活動の仕方ほど強く意識せず、仲間との活動に意味を置いているものと考えられる。したがって、問題点が生じたら仲間て解決し、解決できない場合、指導者に依頼しようとする姿勢が、指導者の求めに応じた指導

(47.0%) を積極的な指導 (37.3%) よりも好む結果につながっているものと推測できる。

表7 利用の仕方別にみた希望する指導方法

	クラブ員多数	クラブ員数人	友人数人	一人	家族	N・A
積極的に進んで	46.9%	59.6%	37.3%	58.1%	66.7%	50.0%
求めに応じて	36.7	31.9	47.0	29.0	33.3	25.0
その他						12.5
N・A	16.3	8.5	15.7	12.9		12.5
計 (=100%)	(49)	(47)	(83)	(62)	(6)	(8)

3. 年令

表8は年令別にみた指導者の配置希望であるが、指導者がいたほうがよいと答えたものは25才以上では、約90%~100%の範囲内にあるのに対して、20才~24才63.6%、15才~19才63.2%と15才~24才では63%前後にあり、明確な相異が読みとれる。また、指導者も管理人も不必要であると答えたものが30才以上の年令のものに全く見当たらないのに対して、年令層が低くなるにつれて、不必要と感じているものが増加している。

表8 年令別にみた指導者の配置希望

	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~	N・A
指導者がいた方がよい	63.2%	63.6%	90.0%	90.3%	100.0%	96.6%	100.0%	91.7%	90.0%
管理人で十分である	8.0	21.2	5.0	0.1					
ともに不要	13.8	9.1	2.5						
N・A	14.9	6.1	2.5			3.4		0.1	10.0
計 (=100%)	(87)	(66)	(40)	(31)	(34)	(29)	(12)	(12)	(10)

希望する指導内容を示したのが表9である。技術指導を最も強く望んでいるのは45才以上の年代であるが、指導者の必要性の場合ほど年令層間の差異が明確に現われておらず、30才~40才85.7%、40才~44才82.1%、15才~19才81.8%と続いていて全体的にかなり高い割合である。一方、低い方では20才~24才69.0%、25才~29才69.4%となっている。ルール・審判法では、45才~49才(41.7%)が最も高く、次いで35才~39才32.4%、25才~29才30.6%、15才~19才27.3%となっているが、このことはだいたい、どの年代層においてもルール・審判法の指導は求められていると解釈してよい。

表9 年令別にみた希望する指導内容

	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～	N・A
技術指導	81.8%	69.0%	69.4%	85.7%	73.5%	82.1%	100.0%	100.0%	77.8%
ルール・審判法	27.3	23.8	30.6	21.4	32.4	25.0	41.7		
用具の使い方	7.3	11.9	8.3	7.1	11.8			14.3	
マナー・エチケット	16.4	16.7	16.7	28.6	23.5	32.1	8.3.3	14.3	44.4
トラブルの防止	14.5	31.0	8.3	7.1	17.6	17.9	8.3		
手軽な運動法	9.1	9.5	13.9	3.6	14.7				
親 睦	14.5	16.7	38.9	14.3	17.6	17.9			
クラブづくり	9.1	16.7	5.6	3.6	5.7				
健康相談	1.8	11.9	11.1	2.9	2.9	3.6			
そ の 他			2.8						
N・A				3.6	5.9				
計 (=100%)	(55)	(42)	(36)	(28)	(34)	(28)	(12)	(11)	(9)

(重複)

年令別にみた希望する指導方法について示したのが表10である。また、学生時代の運動経験を示したのが表11である。19才までは求めに応じた指導(45.5%)が積極的な指導(36.4%)よりも優位に立っているが、20才以上になると積極的な指導を求めるものが、求めに応じた指導を求めるものより多くなっている。

表10 年令別にみた希望する指導方法

	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～	N・A
積極的に進んで	36.4%	45.2%	58.3%	64.3%	55.9%	42.9%	33.3%	72.7%	55.6%
求めに応じて	45.5	38.1	27.8	28.6	38.2	46.4	33.3	27.3	22.2
その他			58		2.9				
N・A	18.2	16.7	13.9	7.1	2.9	10.7	33.3		22.2
計 (=100%)	(55)	(42)	(36)	(28)	(34)	(28)	(12)	(11)	(9)

このように、年令により指導者の必要感、希望する指導内容、方法に差異が見られるが、年令別の運動経験の相異を見ると、30才を境界として差異がみられる。つまりクラブ経験者が30才以上の年代層よりも、29才以下の年代層に多くみられるのに対して、学生時代に経験したことがなかったとするものは、逆に30才以上に多く、29才以下に少ない結果となっている。先述の男女の部分で、

運動経験が種目の技術の難易に影響することを示したが、30才以上と比較して29才以下の年代層は高い技術や豊かな知識を有しているものと考えられる。

表11 年令別にみた学生時代の運動経験

	～14	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～	N・A
クラブ	45.2%	80.0%	50.0%	35.4%	27.0%	20.0%	21.1%	50.0%		75.0%
校内大会	3.2		4.0	14.6		8.6				25.0
授業				10.4	8.1	8.6	5.3			
経験なし	9.7	15.0	34.0	25.0	51.4	51.4	63.2			
その他	35.5	5.0	8.0	10.4	8.1	2.9	5.3		33.3%	
N・A	6.5							50.0	66.6	
計 (=100%)	(31)	(20)	(50)	(48)	(37)	(35)	(19)	(2)	(3)	(4)

4. 運動生活の階層

個人の運動生活を体育事業との関係で把握した場合、C・P・A・Sの基本的類型の当てはまるものと、2つ又は3つに重複して考えられる者までであるが、ここでは4つの階層を考える基本的類型に基づき考察することにする。

指導者の必要性を運動生活の階層別に示したのが表12である。希望の最も多いのが運動競技会やスポーツ教室などのスポーツのプログラムに参加して運動しているP運動者(95.8%)であり、次いで、クラブやチームに入って活動するC運動者(79.7%)、公共体育施設や学校開放等で自由に運動しているA運動者(78.2%)となっている。P運動者で最も希望が多いのは、スポーツ教室参加者に典型的にみられるように、指導されながら活動することに意義を見出し、指導という条件に引かれて運動する運動者が多いからであろう。C運動者とA運動者には差異が現われていない。

表12 運動生活の階層別にみた指導者の配置希望

	C	P	A	その他	N・A
指導者がいた方がよい	79.7%	95.8%	78.2%	45.4%	84.2%
管理人で十分である	8.1	4.2	5.9	54.5	
ともに不要	6.1		7.6		5.3
N・A	6.1		8.4		10.5
計 (=100%)	(148)	(24)	(119)	(11)	(19)

希望する指導内容についてみたのが表13である。技術指導の希望では、C運動者(88.9%)、P運動者(82.6%)、A運動者(66.7%)となっており、C運動者に技術指導を望む者が最も多くみられる。ところで、クラブの分類論の中で、タイプにより分類した場合、対外試合での勝利を目指す競技的クラブと運動を楽しむことに主眼を置いたレクリエーション的クラブとの間に、明確な境界線を引き難いという問題に直面するが、クラブの目標に相異が見られても、程度の差はあるが、対外試合での勝利、技術向上などの面はクラブの活動に刺激を与え、活動を活発化するため、レクリエーション的クラブでも対外試合は行なわれており、また技術練習はクラブの活動の主要な内容でもあるため、このような理由からC運動者に技術の指導の希望が多くみられるものと考えられる。また、C運動者では、ルール・審判法に対する希望も多くみられ(24.5%)るが、対外試合、あるいはクラブ内での試合でも公式ルールが使用されているのが一般的であり、そのためゲームに参加するにしても、審判するにしてもルールに精通することが要求されており、そのために希望が高くなっているものと考えられる。P運動者では技術指導をかなり希望しているが、スポーツ教室の場合、学習プログラムであり何かを学習するために参加しているのであるが、技術学習に大きな関心が向いていると理解できる。一方、ルール・審判法の希望(8.7%)は他の運動者に較べて、かなり低くなっている。現在、スポーツ教室は全国各地で盛んに実施されているが、初心者を対象としたものが多い。そこでは、スポーツクラブへの動機づけ、あるいは、今後の充実した運動生活への動機づけとしての機能をもたせたものが多く、様々な学習内容を運動者が学習することを期待しているが、このような意図と運動者の希望とはズレがあると考えられる。クラブが結成され、運営されていくためには、クラブ内で問題解決を図ることが重要であり、運動者には技術は勿論、ルール等も熟知することが必要である。しかし、そのようなスポーツ教室の意義を意識していないP運動者が多いということを、この結果は示している。A運動者の技術指導に対する希望は、他の運動者に較べて低くなっているが、クラブでは試合という点から、またスポーツ教室では学習プログラムという点から技術修得が大きなウエイトを占める。しかし、A運動者は試合を目指して運動することは少ないし、技術学習を大きな課題として考えているとは考えられず、むしろ開放施設での活動を楽しむに足りる技能が備わっていれば十分と考え、より高度な技能の獲得に他の運動者ほど熱意をみせていないと考えられる。しかし、活動を楽しむために必要なある程度の技能で満足するとは言っても、ゲームの際、ルールは不可欠のものであるが、A運動者の活動は、個人的または少人数で行なうことが多い⁽¹⁶⁾ため、仲間に教えてもらう等の活動が出来難く、ルール・審判法の指導を他の運動者よりも高い割合(29.0%)で求めているものと考えられる。また、このような活動のあり方と関連して、トラブル防止への助力(17.2%)、をかなり希望している。

希望する指導方法を示したのが表14である。C運動者では、指導者の積極的な指導を希望するものの58.2%、求めに応じた指導を希望するもの32.2%となっている。P運動者では、積極的な指導を期待するもの60.9%、求めに応じた指導を期待するもの30.4%となっている。P運動者は、スポー

ツ教室の参加者に見られる如く、指導者の指導に引かれて運動する運動者が多いことを考慮すると、指導者の積極的な指導を希望するものが、求めに応じた指導を希望するものを上回っていることは肯ける。A運動者では、他の運動者と比較して積極的な指導の希望が少なく(37.6%)、求めに応じた指導の希望が多い(41.9%)。A運動者は、開放施設という運動の場に魅力を感じ活動している運動者であり、開放施設を使用して、自由に運動したいと考えている運動者であるため、技術指導の希望が他の運動者より低く、ルールなどの知識面の指導希望が高かったが、これらの希望する指導内容の相異が希望する指導方法に反映していると考えられる。

表13 運動生活の階層別にみた希望する指導内容

	C	P	A	その他	N・A
技術指導	88.9%	82.6%	66.7%	40.0%	81.3%
ルール・審判法	24.5	8.7	29.0	40.0	31.3
用具の使い方	4.2	13.0	8.6		18.8
マナー・エチケット	22.0	13.0	19.4	20.0	31.3
トラブルの防止	11.0	13.0	17.2		37.5
手軽な運動法	5.9	8.7	10.8		6.3
親 睦	17.8	8.7	17.2	20.0	25.0
クラブづくり	6.8	4.3	4.3		25.0
健康相談	5.1	4.3	6.5		
そ の 他					
N・A	1.7		1.1		
計 (=100%)	(118)	(23)	(93)	(5)	(16)

(重複)

表14 運動生活の階層別にみた希望する指導方法

	C	P	A	その他	N・A
積極的に進んで	58.5%	60.9%	37.6%	40.0%	37.5%
求めに応じて	32.2	30.4	41.9	40.0	50.0
その他			1.1		
N・A	9.3	8.7	19.4	20.0	12.5
計 (=100%)	(118)	(23)	(93)	(5)	(16)

5. 種目

種目別にみた指導者の必要性を示したのが表15である。指導者の配置を希望しているものの多い順に種目名を挙げると、和弓 (100%)、剣道 (90.0%)、卓球 (87.6%)、バドミントン (85.7%)、バレーボール (75.0%)、バスケットボール (62.3%) となっている。これらは個人的種目、対人的種目が上位を占め、集团的種目はそれらと比較すると割合に低い値になっていると見ることができ。個人的種目、対人的種目は集团的種目と比較すると、少人数で活動する機会が多いため仲間に教えてもらう場合が少ないことが考えられ、指導者に指導を依頼する傾向があり、その結果が指導者の配置を希望するものが多くなっているものと考えられる。

表15 種目別にみた指導者の配置希望

	バレーボール	バドミントン	卓球	バスケットボール	剣道	和弓	N・A
指導者がいた方がよい	75.0%	85.7%	87.6%	62.3%	90.0%	100.0%	85.7%
管理人で十分である	13.5	4.1	7.7	8.2			4.8
ともに不要	10.4	4.1	1.5	9.8			
N・A	1.0	6.1	3.1	19.7	10.0		9.5
計 (=100%)	(96)	(49)	(65)	(61)	(10)	(19)	(21)

希望する指導内容についてみたのが表16である。技術指導の希望では、剣道や弓道のように全てのものが技術指導を求める種目から、バドミントン (90.5%)、バレーボール (73.6%)、卓球 (71.9%)、バスケットボール (71.1%) まで様々である。このような傾向がみられる理由としては、卓球の場合、他の種目と比較して比較的誰にでも簡単に実施でき、しかも楽しめる種目であるためであろうし、バレーボール、バスケットボール等の種目では仲間多数との活動が多くなり、仲間との教え合いの機会が多くなると考えられ、指導者の指導をそれほど必要としないと考えられるのに対して、剣道や弓道では、仲間同士の教え合いが難しかったり、比較的一般化していない (誰にでも簡単に出来るものではないという意) 種目の故であろう。このように、個人的種目、対人的種目では指導者からの技術指導をかなり求め、集团的種目では、個人的、対人的種目ほど指導者の技術指導を求めていると考えることができるであろう。集团的種目では個人的、対人的種目ほど技術の指導を求めているということであったが、一方、人間関係をめぐっての指導、つまりトラブル防止や親睦への助力の希望をみると、トラブル防止への助力では、個人的種目、対人的種目が剣道 (22.2%)、バドミントン (9.5%)、卓球 (7.0%)、和弓 (5.3%) となっているのに対して、集团的種目では、バスケットボール (36.9%)、バレーボール (13.9%) となっており、トラブル防止に対する指導者の指導を個人的、対人的種目よりも集团的種目の方が希望していることがわかる。また親睦への助力を希望しているものは、個人的、対人的種目で剣道 (22.2%)、和弓 (10.5%)、バドミン

トン (9.5%)、卓球 (8.8%) となっているのに対して、集団的種目では、バレーボール (26.4%)、バスケットボール (23.7%) となっており、集団的種目が個人的、対人的種目よりも、指導者に対して親睦への助力を強く期待していることがわかる。以上のように、技術の指導に関しては、集団的種目は仲間同士の教え合い、話し合いなどの活動により指導面をカバーするため、個人的、対人的種目ほど指導者の指導を必要としないが、反面、集団で活動するため、それに付随した人間関係の問題があり、人間関係を円滑にしていくための助力を、特に希望していると言えよう。

表16 運動種目別にみた指導者の指導内容の希望

	バレーボール	バドミントン	卓球	バスケットボール	剣道	和弓	N・A
技術指導	73.6%	90.5%	71.9%	71.4%	100.0%	100.0%	72.2%
ルール・審判法	19.4	26.2	15.8	47.4	77.8	15.8	16.7
用具の使い方	2.8	4.8	2.5	18.4	22.2	5.3	16.7
マナー・エチケット	16.7	14.3	21.1	26.3	44.4	36.8	11.1
トラブルの防止	13.9	9.5	7.0	36.8	22.2	5.3	16.7
手軽な運動法	9.7	2.4	7.0	13.2	11.1		11.1
親睦	26.4	9.5	8.8	23.7	22.2	10.5	22.2
クラブづくり	2.8	4.8	7.0	15.8	11.1		11.1
健康相談	1.4	4.8	5.3	13.2	11.1		5.6
その他							5.6
N・A	2.8		1.8				
計 (=100%)	(72)	(42)	(57)	(38)	(9)	(19)	(18)

(重複)

表17は種目別にみた希望する指導方法についてみたものであるが、指導者の方から積極的に進んで指導して欲しいとするものと、求めに応じて指導してほしいとするものの全体の中に占める割合を見ていくことにする。剣道では、指導者の方から積極的に指導して欲しいとするもの77.8%、求めに応じて指導して欲しいとするもの0%となっている。和弓では指導者に積極的に指導して欲しいとするもの68.4%、求めに応じて指導して欲しいとするもの21.1%となっている。バレーボールでは積極的に指導者の方から指導してほしいと答えたもの56.9%、求めに応じて指導して欲しいと答えたもの29.2%となっており、またバドミントンでは、指導者の方から積極的に指導して欲しいと答えたもの50.0%、求めに応じて指導して欲しいと答えたもの35.7%である。これらの種目では、いずれも指導者の方から積極的に指導して欲しいと答えたものの方が、求めに応じて指導して欲しいと答えたものより高い割合を示している。一方、卓球では、求めに応じた指導を希望するもの(52.

6%) が指導者の方から積極的に指導して欲しいとするもの(40.0%)を上回っている。これは、卓球が比較的誰にでも簡単に出来る種目であり、技能の巧拙に関係なくある程度楽しめる種目であるためと考えられる。

第17表 種目別にみた希望する指導方法

	バレーボール	バドミントン	卓球	バスケットボール	剣道	和弓	N・A
積極的に進んで	56.9%	50.0%	40.0%	39.5%	77.8%	68.4%	33.3%
求めに応じて	29.2	35.7	52.6	42.1		21.1	44.4
その他							5.6
N・A	13.9	14.3	7.0	18.4	22.2	10.5	16.7
計 (=100%)	(72)	(42)	(57)	(38)	(9)	(19)	(18)

II. 運動者の変化

1. 技能の変化とその理由

指導者の配置されている施設と配置されていない施設で、施設を利用するようになってどのような技能の変化が現われているかを示したのが表18である。指導者の配置されている施設ではかなり向上したと答えたものが32.2%、少し向上したと答えたものが51.7%で、合計83.9%のものが向上したと答えている。また、変化がないと答えたものは16.1%となっている。一方、指導者を配置していない施設では、かなり向上したと答えたもの20.0%、少し向上したと答えたもの48.0%で合計68.0%のものが向上したと答えたことになる。また変化がなかったと答えているものが34.0%いる。

表18 技能の変化

	指 導 者 有			指 導 者 無		
	男	女	計 [※]	男	女	計 [※]
(1)かなり向上	39.4%	31.0%	32.2%	20.0%	11.1%	20.0%
(2)少し向上	48.5	57.1	51.7	46.7	50.0	48.0
(1) + (2)	87.9	88.1	83.9	66.7	61.1	68.0
(3)変化なし	12.1	11.9	16.1	33.3	38.9	34.0
計 (=100%)	(33)	(42)	(143)	(30)	(18)	(50)

〈注〉 ※は性別不明も含む

このことは、指導者の配置された施設に、かなりの向上を示したものが配置されていない施設より12%多く存在することになり、また少し向上したものを含めて、技能の向上のみられたものが約

16%多くいることになる。この項目は、2週間に1回以上の割合で活動しているものに対して調査されているもので、指導者の配置された施設の方が技能の向上の程度が高いと推測される。

先の質問で向上した、と答えたものにその理由を尋ねた結果が表19に示してある。技能向上の理由として、指導者の配置された施設では指導者が上手に指導してくれたからとするもの48.3%、仲間・知人が上手に指導してくれたからとするもの41.7%という結果になっている。一方、指導者の配置されていない施設では、仲間・知人がうまく指導してくれたからとするもの52.9%、自分の努力の結果とするもの32.4%、指導好きな人（これらの施設には指導者が配置されていないのであるが、施設利用者の中の指導好きな人が指導を行ない、その人を配置された指導者と理解したものとされる。以下指導者の配置されていない施設では、この名称を使用していくことにする）が上手に指導してくれたからとするもの11.8%という結果になっている。

表19 技能の変化の理由

	指導者有			指導者無		
	男	女	計 [※]	男	女	計 [※]
(1)指導者による指導	55.2%	62.2%	48.3%	5.0%	18.2%	11.8%
(2)仲間・知人による指導	37.9	43.2	41.7	55.0	36.4	52.9
(3)自分の努力	20.7	21.6	26.7	30.0	27.3	32.4
(4)そのほか		2.7	1.7	5.0	9.1	5.9
(5)N・A	13.8	60.8	12.5	5.0	18.2	8.8
計 (=100%)	(29)	(37)	(120)	(20)	(11)	(34)

〈注〉 ※は性別不明も含む

(重複)

向上の理由として、指導者の配置された施設では、指導者の指導を挙げたものが約48%で最も多く、上手な指導が技能の向上に大きく影響していることがわかる。指導者を配置していない施設では、仲間・知人の指導や自分の努力、あるいは指導好きな人の指導により、配置された指導者の不在をカバーしていると考えられるが、それらの活動にも限界があり、指導者の配置された施設よりも約18%技能の向上のみられないものが多いという結果につながっているものと推測できる。

2. 運動の楽しさとその理由

施設開放の利用に伴う楽しさの程度を聞いたのが表20である。指導者の配置された施設では楽しく運動したと答えたものが83.9%、まあまあ楽しかったと答えたものが16.1%、楽しくなかったと答えたものは見られない。一方、指導者の配置されていない施設では、楽しく運動したとするもの、68.0%、まあまあ楽しかったと答えたもの30.0%という結果になっている。両者の間に、楽しくな

かったと答えたものについては差異は見られないが、楽しく運動したと答えたものの間に相違が見られる。つまり、指導者の配置されている施設では約84%のものが楽しく運動したと述べているのに対して、指導者の配置されていない施設では、約70.0%のものが楽しく運動したと答えており、約14%の差が見られる。

表20 運動の楽しさの程度

	指 導 者 有			指 導 者 無		
	男	女	計 [*]	男	女	計 [*]
(1)楽しく運動した	72.7%	88.1%	83.9%	60.0%	77.8%	68.0%
(2)まあまあであった	27.3	11.9	16.1	36.7	22.0	30.0
(1) + (2)	100.0	100.0	100.0	96.8	100.0	98.0
(3)楽しくなかった				3.3		2.0
計 (=100%)	(35)	(42)	(143)	(30)	(18)	(50)

<注> ※は性別不明も含む

まあまあ楽しく運動したと答えたものまで含めて、楽しく運動したものに、その理由を聞いたのが表21である。指導者の配置された施設では、指導者の上手な指導により楽しさを得たとするもの37.1%、仲間が一緒だったからとするもの43.4%などとなっている。一方、指導者の配置されていない施設では、仲間と活動したからとするもの66.0%、新しく仲間が出来たからとするもの32.0%などになっており、運動仲間をめぐっての楽しさが目立っている。

表21 楽しさの理由

	指 導 者 有			指 導 者 無		
	男	女	計 [*]	男	女	計 [*]
(1)指導者の上手な指導	42.4%	42.9%	37.1%	3.4%	11.1%	6.0%
(2)仲間が一緒だった	39.4	40.5	43.4	44.8	55.6	66.0
(3)新しく仲間ができた	18.2	19.1	16.8	31.0	16.7	32.0
(4)その他	6.1		3.5	6.9	5.6	6.0
(5)N・A	24.2	11.9	32.2	20.7	16.7	24.0
計 (=100%)	(33)	(42)	(143)	(29)	(18)	(50)

<注> ※は性別不明も含む

(重複)

3. 仲間関係の成立とその理由

施設開放を利用するようになって新しい仲間が出来たかを聞いたのが表22である。指導者の配置された施設では、たくさんできたと答えたものが42.7%，何人かできたと答えたものが41.3%，できなかったとするものが16.1%となっている。指導者の配置されていない施設では、たくさん出来たと答えた者が30.0%，出来なかったと答えたものが30.0%となっている。このことは指導者を配置した施設の方が、配置していない施設よりも、仲間がたくさんできたと答えたものが約13%多く、またできなかったと答えたものが約14%少ないことを示している。

表22 仲間関係の成立

	指 導 者 有			指 導 者 無		
	男	女	計 [※]	男	女	計 [※]
(1)たくさんできた	42.4%	47.6%	42.7%	10.0%	22.2%	30.0%
(2)何人かできた	42.4	40.5	41.3	44.8	38.9	40.0
(1) + (2)	84.8	88.0	83.9	41.4	61.1	70.0
(3)できなかった	12.1	11.9	16.1	60.0	38.9	30.0
計 (=100%)	(33)	(42)	(143)	(30)	(18)	(50) (50)

〈注〉 ※は性別不明も含む

表23 仲間関係成立の理由

	指 導 者 有			指 導 者 無		
	男	女	計 [※]	男	女	計 [※]
(1)指導者の配慮	28.6%	35.1%	34.2%	33.3%	18.2%	20.0%
(2)自らの心がけ	46.4	21.6	27.5	66.7	27.3	34.3
(3)なんとなく	17.9	32.4	29.2	66.7	45.5	37.1
(4)そのほか		2.7	6.8	16.7	9.1	8.6
(5)N・A	17.9	13.5	17.5	58.3		20.0
計 (=100%)	(28)	(37)	(120)	(12)	(11)	(35)

〈注〉 ※は性別不明を含む

(重複)

仲間関係が何故成立したのか、その理由を求めたのが表23である。指導者の配置された施設では、指導者が配慮してくれたからとするもの34.2%，自らの心がけによるもの27.5%，なんとなく仲間ができたとするもの29.2%などとなっている。一方、指導者の配置されていない施設では、指導好きな人の配慮によるもの20.0%，自らの心がけによるもの34.3%，なんとなく

仲間が出来たとするもの37.1%などとなっている。このように指導者の配置されている施設で、指導者の配慮により仲間ができたとするものが約34%あり、仲間関係を形成していく上での指導者の配慮の重要性がわかる。

結 語

近年、運動欲求の高まりに呼応して様々な体育事業が用意され、運動の機会を提供している。施設開放もそのような動きの中で増加しつつあり、特に、学校運動施設の開放が目ざましく増加している。このような運動者の増加に伴ない、運動者も多様化しており、指導のあり方が問われているが、本研究の結果を以下に総括しておく。

指導者の必要性については、運動者の指導者に対する配置希望、あるいは運動者の変化の点から指導者の配置された施設に比較的良好な結果が得られていることから、施設開放には指導者を置くことが望ましいことがわかる。しかし、必要とは言いながらも運動者の属性等の相異により、希望にかなりの変化が見られる。つまり、運動者の性、開放施設での活動の仕方、運動者の営む運動生活、年齢、あるいは運動種目により、指導者に対する必要感が異なっているということである。また、指導内容、指導方法に関しても、運動者の属性等の違いにより、希望に差異が見られるが、これらのことは、運動者を一律に、同じように指導すべきでなく、運動者の特長を的確に把握し、対象をみきわめた、きめ細かな指導を行なう必要のあることを示している。性別では女子に、年齢では年代の高い層に指導者を求める割合が高くなっており、指導者の強い指導を期待しているが、また活動の仕方では仲間を伴った活動か一人での活動かという点が、運動種目では集団の種目か、個人的種目かという点が指導のあり方を規定する着眼点になるものと考えられる。

本研究は地域体育指導者に関する体育経営学的立場からの研究であったが、今後に残された課題を次のように考えている。

1. 指導者に対する運動者の必要感、希望する指導内容、指導方法を様々な角度から探り説明を加えてきたが、それらの推測に基づく説明の妥当性を確認してやる必要がある。また、運動者の希望に影響する主体的条件として、過去の運動経験、特に学生時代の運動経験が大きく作用していることがわかったが、運動者の希望を規定する他の要因を探るため、他の多様な角度から検討を加える必要がある。これらのことが明確になった時、施設開放指導者のあり方は、確固たる理論的背景をもち、確かな文脈の中で語られることになるだろう。また、地域体育指導者の養成・研修プログラムを考える際の基礎的資料になり得ると考えられる。

2. 施設開放指導者をとり上げたが、地域体育指導者の体系を考える上で、スポーツクラブ、スポーツ教室の指導者についても検討を加え、各体育事業の指導者の望ましいあり方、条件を明確にする必要がある。これらの問題は指導者の養成・研修と深く関わっており、緊急の解決を要する問

題である。

注

- (1) 文部省：体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について〔保健体育審議会答申〕 昭和48年
- (2) 片山孝重：体育指導者に関する研究。特に、地域社会の体育指導委員について 体育学研究 第15巻第5号 昭和46年
- (3) 正貞彦，野間口英敏：体育指導委員の職務等に関する調査研究 東海大学体育学部紀要第2輯 昭和47年
- (4) 全国体育指導委員連合：「体育指導委員の現状」—地域スポーツ振興に関する調査研究事業報告書—昭和52年3月
- (5) 杉本厚夫・桑野豊：「ライフステージ別にみたスポーツ指導者の指導活動の違いについて」日本体育学会，第28回大会号，P142
- (6) 犬飼義秀・桑野豊：「地域別（都道府県別）にみたスポーツ指導者の職業構成とその指導活動のちがいについて」日本体育学会第28回大会号 P144
- (7) 日本体育協会：「スポーツ指導者の実態調査報告書」昭和51年3月
- (8) 山本英毅・中島豊雄：「新しい社会体育指導者像—社会体育指導者の活動の実態と意識に関する調査結果から—」体育社会学研究5 P58 昭和51 道と書院
- (9) 江橋慎一郎：「体育科学事典」第一法規 P10
- (10) 野口義之：「体育の科学」昭和46年12月号 P762
- (11) 金崎良三：「社会体育指導者の条件 役割の検討」体育社会学研究5 P87 道と書院 昭和51年
- (12) 宇土正彦：体育管理学 大修館 P43 昭和45年
- (13) Edith L. Ball & Robert E. Cipriano : Leisure Service Preparation —A competency based approach— Prentice Hall P172 昭和53年
- (14) Joseph E. Curtis : Recreation —Theory and Practice— The C. V. Mosby Company P126 昭和54年
- (15) 文部省：我が国の体育。スポーツ施設 昭和51年3月 P67
- (16) 作野史郎他：体育管理学入門 大修館書店 P54 昭和51年

参 考 文 献

- ・宇土正彦：体育管理学 大修館書店 昭和45年
- ・宇土正彦他著：体育管理学入門 大修館書店 昭和51年
- ・体育社会学研究会編：体育社会学研究5 「体育・スポーツ指導者の現状と課題」 道と書院 昭和51年
- ・社会体育研究会編：スポーツクラブ 新宿書房 昭和54年
- ・社会体育研究会編：これからのコミュニティスポーツ ぎょうせい 昭和52年
- ・沢登貞行，村上克己著：コミュニティ・スポーツへの挑戦 不味堂出版 昭和55年
- ・斉藤源吾：コミュニティスポーツ 杏林書院 昭和54年
- ・平沢薫，桑野豊：生涯スポーツ プレスギムナスチカ 昭和52年
- ・日本体育学会編：「コミュニティ・スポーツ」 体育の科学 昭和49年10月号

